

長野県納税貯蓄組合連合会長賞

《コロナ禍で気付けた税の恩恵》

学校法人長聖佐久長聖中学校 三年 須賀まりの

国内でも新型コロナウイルスの感染拡大が懸念され始めた二〇二〇年春。

小学六年生だった私がまだ危機を身近に感じられないまま、学校は長期臨時休業に入った。私はのんきに休暇気分で過ごしていたが、飲食店を営む両親は違った。常に張りつめた空気が居間に充満していたのは、幼いながらに気付いていた。

私は当時を振り返っていて気になった。なぜ私の両親のお店はコロナ禍でも持ち堪えることができたのだろうか？私の家はとても裕福とは言えないし、お店自体も特段人気店というわけではない。私は、この作文を書く良いきっかけになればと思い、父に尋ねた。

「それは、国や自治体からの助成金のお陰だよ。」

父がお世話になったのは、これから紹介する四つの助成金らしい。

「一つめに持続化給付金は、個人事業者に給付される給付金だよ。使途や用途を問わず、最大百万円がもらえるから結構助かったよ。」

私が先をうながすように頷く。

「二つめに事業復活支援金は、売上が大きく減少している企業等に対して事業の立て直しや継続を支援するために給付される、事業全般に使える助

成金なんだ。そして残り二つの助成金は、少し似ているんだ。」

「時短協力金と休業支援金？」

「そう。どちらも国や自治体による時短や休業の要請に従い、協力したことに對して給付される助成金なんだよ。」

父は続ける。

「私達家族は、これらの助成金のお陰で今もこうして暮らせているんだ。もし、給付が間に合わなかったら、家計はきつと大きく傾いていた……。」

夕日に目をやり、父はしみじみと語った。私は正直話に飽き始めている。

「そしてこれらの助成金は、税金から支払われているんだ。」

父から税金という言葉が聞こえて、私は本来の目的をハツと思い出し、再度耳を傾けた。

「確かに税金は世間から疎まれる存在だが、私達国民は税金によって支えられていることを忘れないでほしい。今後様々な場面で納税することになると思うが、その税金は必ず、どんな形でも自分に戻ってくる。」

現在、日本はコロナ禍という大きな波を乗り越えつつある。それには税金の力が不可欠だったはずだ。しかし、普段ではその恩恵を感じられにくい。この先、少子高齢化や経済の低迷など、多くの苦難が待ち受けているであろう日本で生きるには、まず国民一人ひとりが税金の恩恵を理解することが大事なのではないか。